

# 『松浦宮物語』 華陽公主論

伊 勢 光

「キーワード…①華陽公主 ②藤原定家 ③式子内親王 ④「女」の苦悩 ⑤男性のための物語」

## 一 はじめに

藤原定家作と思しき『松浦宮物語』には、主人公橘氏忠の恋の相手として三人の女性が登場する。本稿は、その中でも特に氏忠と密接にかかわり、氏忠帰国後には夫婦同然の関係となる華陽公主について論じるものである。

この華陽公主に対しては既に萩谷朴が『松浦宮物語全注釈』（若草書房、一九九七）の注において「弁少将に琴の秘曲を伝えるべくこの世に生を享け、弁少将との宿縁に結ばれて離れることの出来ない女性。すなわち音楽的神秘を基調としたこの物語の第二テーマのヒロインである」と指摘しており、非常に重要な人物ということとは間違いない。

しかし、一方で『松浦宮物語』中において華陽公主がどのように描かれているかという具体的な指摘は現在に至るまで十分なされてはいないように思われる。そのことは、とりもなおさず『松浦宮物語』の研究が未だに十分な進展を見ていないことと密接にかかわる。『松浦宮物語』を論じる上で欠かせないであろう先行物語との関連にしても、明白になっているのは『うつほ物語』や『浜松中納言物語』から多分に影響を受けているだろうということだけで、ようやく最近になって少し詳細に『源氏物語』『須磨』『明石』両巻の影響があるという指摘や、『狭衣物語』の影響があるという指摘がされてきたに過ぎない。

そこで本稿では『松浦宮物語』の華陽公主を論じながら、しかし単なる人物論にとどまらず、物語の〈作者〉がどのような意識を持って華陽公主を造型しているかということも含めて様々な角度から『松浦宮物語』を考えていきたい。『松浦宮物語』は華陽公主を通して何を試みているのか、最終的にはそのようなところを少しでも明らかにしていきたいと考えている。

なお、引用した本文とページ数は『新編日本古典文学全集 松浦宮物語』(小学館、一九九九)のものである。

## 二 『夜の寢覚』中の君との共通性

八月十三日の夜、氏忠は楼で琴を弾いている老翁と出会う。感動した氏忠は、老翁から琴を習おうとするが老翁はそれを断る。自分よりもっと師匠に適した人物がいるというのである。それが華陽公主であった。老翁は公主のことを次のように言う。

女の身なれど、前の世に琴を習ひて、しばしこの世に宿りたまへるゆゑに、おのづからさとりありて、その手を仙人に伝へたまへり。  
(二七ページ)

昔からの宿命により音楽を仙人から伝授されるという話は、一見『うつほ物語』からの影響を想起させる。それもあろう。『うつほ物語』で、天人は俊蔭に次のように語っている。

天の掟ありて、天の下に琴弾きて族立つべき人になむありける。我は、昔、いささかなる犯しありて、こより西、仏の御国よりは東、中なるところに下りて、七年ありて、そこにわが子七人とまりにき。その人は、極楽浄土の樂に琴を弾き合はせて遊ぶ人なり。そこに渡りて、その人の手を弾き取りて、日本国へ歸り給へ。  
(『うつほ物語 全』「俊蔭」一四ページ)

他の人物を琴の師匠として紹介するという点でも、この会話文に類似が見受けられる。しかし一点、無視できない大きな違いがある。それは『うつほ物語』では仙人から琴の伝授を受けるのが俊蔭という男性であったのに対し、『松浦宮物語』の場合は伝授を受けるのが女性（華陽公主）であるという点である。左記の引用箇所でもそれは二重傍線部「女の身なれど」と、逆説の形で明示されていた。この差異は見過ごせない。「女の身」という言葉の持つ意味は重い。

「女の身」。それは産む性であり、また仏教思想からすれば罪深い穢れた身体である。だからこそその「なれ

ど」であろうが、ことはそれだけでは片付かない。小嶋菜温子が『物語の千年』（森話社、一九九九）の鼎談で「恋における女の罪深さ、女の身の罪深さが主題化しやすい」「物語化されるのに適しているのは、やはり素材としての女」と述べるように、この性差、「女の身」というものは物語文学の中で重要な素材、モチーフとしてある。この性差の問題は後述するとして、ひとまず『うつほ物語』と『松浦宮物語』の伝授を受ける性別の違いは大きいことを確認しておきたい。

となれば、やはり『夜の寢覚』の影響を考えないわけにはいかない。『夜の寢覚』では、ヒロイン中の君が天人から琴の伝授を受ける。その際に天人は次のように言うのである。

おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝えたてまつりたまふばかり

（『新編日本古典文学全集 夜の寢覚』巻一、一七〜一八ページ）

天人と仙人の違いは気になるが人ならぬ者から琴を習うという点は華陽公主とまったく同じであり、中原香苗が述べるように「華陽公主と中の君は、前世からの因縁によって秘曲を受けるといふ点において共通する」<sup>(3)</sup>のである。

また、中原は両者とも不幸な運命を予言されるとして、華陽公主の受けた予言に対して次のように述べる。

この予言の内容は、彼女は、「このかた」（愛情方面…角川文庫訳）に乱れがあると命を落とす運命にある

ということであった。これは華陽公主が弁少将と契ることによって亡くなるということを暗示している。

華陽公主は「琴の声によりて、必ず身を滅ぼすゆゑともなるべし」（四九ページ）という予言を仙人から受けたとある。ただ不幸な予言を両者受けていることはその通りのだが、中原はこの「身を滅ぼす」という言葉、やや字面通りに受け取っている感がある。ここの「身を滅ぼす」というのはこの場合、「亡くなる」「死ぬ」ことだけを意味するものではない。むしろ、「身の破滅」「人生が駄目になる」というような意味（『うつほ物語』「国譲・下」巻では源仲頼が「身をも滅ぼして」という用例があるが、その用例は明らかにこの意味だろう）も含めて捉えたほうがよいだろう。そのほうが『夜の寢覚』中の君との類似性も強まる。

となれば、この予言は中原が言うように「亡くなるということを示している」だけではなく、転生後まで影響を及ぼすものだと考えられる。転生後、華陽公主は『夜の寢覚』中の君の受けた予言「心を尽くしたまふばかり」をなぞるように、氏忠の心変わりに悩むようになる。『夜の寢覚』から『松浦宮物語』へと天人（＝仙人）から女に秘曲とあやにくな定めが同時にもたらされる話が継承されていく。また『松浦宮物語』では「女の身」はいわば二度「滅ぶ」ともいえる。一度目は死ぬことで、二度目は嫉妬に苦しむことで。二度目の「滅び」は物語に描かれるのは、そのほんの序曲に過ぎないが、その可能性については後で詳しく述べる。

なお、一度亡くなる際に華陽公主の美しさがクローズアップされることは、物語が女の「身の滅び」に対して関心を持っていた一つの証拠になるかもしれない。物語には次のようにある。

涙のこぼるるを扇に紛らはして、傍ら臥したまへるさま、灯籠の火の光のほのかな火影に似るものなくめ

でたきを

(五二ページ)

語り手の視点から、火影を通して華陽公主の美しさが描きとられている。はっきりと顔を描かず、あえて火の光で美しさを描くのは『源氏物語』にも例があるが、『夜の寢覚』中の君にもそういった描かれ方をする場面がある。

様体小さやかに、をかしげに見えて、さやかなる火影に類なく、夜見む玉はかくやと、御心おどろかれて、めづらかに御覽せらるるに、うちもてなしたるさまも、ものうちきこえて笑ひたまひけるけはひ言へばおろかなり。

(巻三、一五二ページ)

この火影に見えた女の美しさが、『夜の寢覚』では帝の執心を生む。火影の美しさという点でも、共通する二人であった。

転生後、公主は氏忠が他の女に心を分けることを苦しむようになるが、それも『夜の寢覚』を想定すればある意味で当然の帰結であったといえよう。嫉妬に苦しみつつも、その男の子どもをはらんでしまう「女の身」というものについても、物語は『夜の寢覚』の問題意識を引き継いでいると考えられる。

さしあたり、本項では華陽公主が『夜の寢覚』の中の君と共通性が高いことを、中原の論を検証しながら、さらに物語が「女の身」、そしてその「滅び」に対して何らかの問題意識を持っていることを見通しのみ述べた。彼女が受けた予言はその転生後も続く。そして、「女の身」はどのようにその問題にかかわってくるのか。

それは次項以降で、再度ふれることにしたい。

### 三 『源氏物語』紫の上との共通性

氏忠と契りを交わし琴を伝授し終わった後、公主は一度死去する。その時の様子は前項の最後に少しあげたが、さらに次のように続く。

やがて露の消えゆくやうに、言ふかひなく見えたまへば、御前にさぶらふ限り、騒ぎ立ちて泣きとよむに、御門も聞こしめしつけて、いと言ふかひなく、くちをしきことをおぼし嘆く。（五一―五三ページ）

臨終の様子が「露」で表現される。この様子は実は『源氏物語』の紫の上とよく共通するのである。

さるは身にしむ許おぼさるべき秋風ならねど、露けきおりがちにて過ぐし給。

（『新日本古典文学大系 源氏物語』「御法」四卷 一六九ページ）

まことに消えゆく露のこゝちして限りに見え給へば、御御誦行の使ども、数も知らず立ちたはぎたり。

（「御法」四卷 一七一ページ）

病に悩む紫の上は出家を許されることもなく、ともすれば自分の身を顧みると涙がちになる。その涙の様子が「露けき」と表現され、そしてその「露」は紫の上本人の象徴となり、露のようにはかなく亡くなっていく。他に「露」で臨終場面が描かれる女君の例は『松浦宮物語』になく、その「露」で表現されるはかない臨終が描かれる点で、華陽公主は紫の上の造型を負っていると考えられる。

理想的な男性に愛されながらも嫉妬に苦しむという華陽公主の造型もまた、紫の上に由来するものである。『松浦宮物語』には次のようにある。

心置かれて、思ひの外なるに、うらなう待ち喜びつる心のうちの、少し恥ずかしううち背かれて、涙の落ちぬること、「我ながら、いつ慣らひける心ぞ」と、思ひ知らるれ。

身を代へて知らぬ憂き世にさすらへて波越す袖のぬるるを見む思ひ寄らぬ心疾さは「これも曇りなきにや」とそら恥づかしきものから、

「知らぬ世も君にまどひし道なればいづれの浦の波か越ゆべきあやしう。夢のやうなるひが耳の聞こゆるかな。などかう心得ぬことは」と、せめてかき寄すれど、なほうちこぼれつつ解けぬ御気色、

(一三七ページ)

勸のよい華陽公主は、氏忠が他の女(鏡に見える唐后)に心を移したことを早くも感じ取る。「心置かれて」「涙の落ち」るのを覚える公主の姿は貴族社会が一夫多妻制であったことを考えればやや嫉妬深い感もないではないが、異国に転生してまで結ばれた相手であってみれば、当然の嫉妬であったともいえよう。「袖のぬる

る」将来を早くも予感した恨みの歌を詠みかけ、かき抱こうとする氏忠にも「解けぬ気色」でつれない態度をとる公主。「いつ慣らひける心ぞ」と、今までの氏忠に慣れ親しんだ態度を反省さえしている彼女の姿からは、今後の苦悩の可能性が提示されている。二度目の「滅び」の序曲である。

特に注意すべきは、「涙の落ちぬる」「袖のぬるる」「なほうちこぼれつつ」と公主もまた、この短い場面でも、三度も紫の上でいうところの「露けき」を連想させる涙が描かれるところである。転生した公主は、この日本で一人きりである。今後は、嫌でも氏忠一人を頼りにして生きていかなければならない。歌にあるように「憂き世にさすら」う覚悟をしなくてはならないのである。いわば『竹取物語』のかぐや姫が月に帰ることを拒否して帝と結婚したとしたら、おそらくこうなっただろうかという境遇である。「憂き世」を知れば知るほど「袖」がぬれる。思えば、紫の上も二条院の光源氏邸に引き取られて以降、ほとんど一人きりの状況であった。紫の上はそんな自分の身を顧み、次のような思念を抱いていた。

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、物のあはれ、おりおかしき事をも見知らぬさまに引き入りしづみなどすれば、何につけてか世に経るはえなくしさも常なき世のつれなくをも慰むべきぞは、大方、物の心を知らず、言ふかひなきものにならひたらむも、生ほし立てけむ親もいとくちおしかるべきものにはあらずや

〔夕霧〕四卷 一三二一―一三三二ページ

「女の身」の生きにくさに思いをいたした箇所として有名な部分である。「物のあはれ」を見聞きしないわけにはいかない気持ちと、そのために負わねばならぬつらさとの間で葛藤する紫の上の女心があらわれており、

これも公主に関連してくるものがある。

というのも公主は「物のあはれ」を実現させるために氏忠に珠を与え、わざわざ日本にまで転生してきた。しかし、頼りにした肝心の男の心中は移ろいやすく今後も相思相愛の関係でいられる保証はどこにもない。いわば自分の身を扱うのにしても、男の顔色をうかがわねばならないのである。彼女は物語の最後で、その冷酷な事実に悟らされる。そこに紫の上につながる葛藤の萌芽がある。女の身が「あはれるもの」であるということ、紫の上、『夜の寢覚』中の君に続いて公主もまた読者に示していると考えられるのである。

前項では『夜の寢覚』中の君との関連を中心に考察したが、そもそもその中の君に紫の上の影響があることは明らかである。『松浦宮物語』は、華陽公主造型の際に紫の上と中の君の二人から影響を受けたと考えるのが妥当であろう。三人の女性は、どれも相手の男には新しい女がおり、さびしく自分を抱きしめる孤独な女君であった。本項であつかった「女の身」の問題を、『松浦宮物語』はあぶりだしていよう。

しかし、そう結論付けて、この問題を終わらせるには気になる点がある。というのは、『源氏物語』の紫の上にしても『夜の寢覚』中の君にしても、その「女の身」の生きづらさ、女が抱える苦悩の問題については、相当程度深められているといつてよい。紫の上が導き出した「女の身の生きづらさ」は、さらに『夜の寢覚』中の君の問題へと引き継がれていった。中の君はさらに、苦悩を抱えながらも妊娠し母となるという筋立てで、女の身とは何か、女が「産む性」の機能を果たし、母となるとはどういうことなのかという問題を突き詰めていった。一方の華陽公主は、確かに言葉の上では紫の上や中の君などの系譜につらなる「女の身」「女の苦悩」の問題が嫉妬や涙、また妊娠などの道具立てで取り上げられてはいるものの、物語全体の印象としてはそれらの問題はほとんど浮かび上がってこないのである。言い換えれば、たとえば『夜の寢覚』の評価としてよくい

われる「女の心理を描く」という命題は、まったくといっていいほど『松浦宮物語』では主題化されていないように思われる。いったいそれはなぜであろうか。その理由は、次項で考えることにしたい。

#### 四 式子内親王との共通性

商山での琴伝授の際、別れ際に華陽公主と氏忠は歌の贈答をする。

よしここに我が玉の緒は尽きななむ月のゆくへを離れざるべく

公主いとあはれとおぼして、

手なれぬる玉のを琴の契りゆるあはれと思ひ悲しとも見る

（四四ページ）

「玉の緒」という語を媒介に二人のコミュニケーションを成立させる。歌の贈答としてはずらしがなく素直すぎており逆に不自然である。物語の書かれた中世という時代をうかがわせるが、他方二人の想いが通じ合っていることを示すための意図とも考えられよう。

問題となるのは「玉の緒」という歌語についてである。このことばについては『新編日本古典文学全集』の頭注に次のような『万葉集』引用の指摘がある。

『万葉集』二七八八、作者未詳「息の緒に思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも」、『万葉集』

二七八九、作者未詳「玉の緒の絶えたる恋の乱れなば死なまくのみのまたも逢はずして」

(四四ページ)

なるほど、確かにこれらの『万葉集』の影響はある。言わずもがなのことではあるが、『無名草子』の時代から『松浦宮物語』において『万葉集』の影響の大きさは指摘され続けてきたのであり、その正しさは揺るがないだろう。しかし、本当に『万葉集』だけなのだろうか。物語は公主と氏忠に万葉調の歌を詠ませて古風な恋を演出したかったということなのだろうか。

確かに、舞台を藤原京の時代に設定している以上、歌のことばを万葉調に整え、古風な雰囲気を出したかったという意味合いはあるだろう。しかし、それだけではあるまい。浅田徹は『松浦宮物語』の作者と思しき藤原定家について次のように述べる<sup>(4)</sup>。

定家の本歌取りは「模倣」を基にした詠歌ではなく、古歌を異化しつつそこに新たな世界を付与していく行為だったはずである。

浅田も指摘するように、氏忠の歌の傍線部「ななむ」などは古風な言葉遣いである。浅田は定家の『拾遺愚草』にこのような古風な言葉遣いが見られないことを指摘し、作り物語の世界のみでしかこの語り口を容認できない定家の態度を読み取るが、定家の歌に対する精神性が「古歌を異化しつつそこに新たな世界を付与」することであったとすれば、その姿勢は『松浦宮物語』にも生かされているはずである。つまり、単純に『万葉

集』の歌語や語り口を用いてそれでよしとする物語ではないということだ。

そう考えたときにやはり先にあげた氏忠と華陽公主の贈答歌二首には『万葉集』の歌にくわえて、この歌も引用されているのではないかと考えざるを得ない。

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする

（『新古今和歌集』巻十一・一〇三四・式子内親王）

有名な歌である。百人一首にも採られているから、おそらく定家お気に入り的一首だったのだろう。この歌も平安後期にはあまり用いられなくなっていた「玉の緒」という歌語を使用している点、また「……なば」という仮定の用法を用いている点など、『万葉集』の影響を感じさせる一方で、恋に身悶える女の情熱を鮮やかに描き出して秀逸な一首である。

恋に対する命を捧げんばかりのこの情熱を、物語は華陽公主に付与しようとしたのではないだろうか。公主は恋の情熱により実際に死にいたるわけで、その点、公主は式子の歌の通りに半生を生きたといっても過言ではあるまい。

なお、この式子の歌は、その公主の臨終場面でも使われている。

公主は、宮に帰りましたまひておぼし続けるに、「さまざま憂かりける契りはさらにも言はず、我が心もかうながらこの世に長らへば、かならず憂き名をとどむべき身なりけり」  
（五一ページ）

この世に「長らへば」絶対に「憂き名」、悪評が立つ。だから死んでしまったほうがいいのだ、その思念はまさに式子の思念と重なり合う。しかも、物語はその思念をある面で正しいものとして描いていくのだ。日本であれば、生きながらえても知り合いのいる中国にまで「憂き名をとど」める心配はない。式子の歌意を生かしつつも男との恋愛は忍ばずに完遂する、その折り合いをつけるためのモチーフとして日本への転生が選ばれたのであったろう。

これまた言うまでもないことであるが、『松浦宮物語』の作者が定家だとすれば、式子内親王は『松浦宮物語』作者の憧れの人である。実在の式子内親王は定家の十三歳年長であるが、定家は自らの日記『明月記』のなかで彼女への想いを吐露していることは有名な話だ。

そう考えれば公主と氏忠との関係は、現実の定家と式子の立場を基に考えられたと思しき設定が何とも多すぎる。氏忠は弁少将であるが、定家自身若い頃は長く少将であったし、一方の式子は華陽公主と同じく帝の娘つまり手の届かない内親王である。さすがに十三歳も離れてはいないが女性の側が年上であるのも、物語の二人と一致する。氏忠が「うちにほひたまへる御衣のにはひなどは、なべての香にもあらぬ、ただ世の常ならずなつかしう」（四九ページ）といい香りをうっとりとかぐのも、定家が式子のあたりに漂う香りに恍惚となつたという現実の『明月記』の記事と符合する。先に私は華陽公主の造型における式子の影響を指摘したが、それでは実は不十分で、くわえて男との関係性まで物語は自らのテキスト内に取り込んだということもいえるのであった。

とすれば、物語が華陽公主を転生させ、しかもそれにもかかわらずなぜ公主の「女の苦惱」のようなものを

焦点化しなかったかがおぼろげながらに見えてくる。物語は式子の影を背負う公主を手放したくなかった。そして、そんな公主に嫉妬される男の幸せな図というものを描きたかったのではないだろうか。つまり、もともと「女の苦惱」を正面から描くことに物語の関心はさほどなかったのである。素材としては「女の苦惱」を描くにたる前世の宿世を負わされた公主がおり、その公主には『源氏物語』の紫の上、『夜の寢覚』の中の君の像を一面重ね合わせている。にもかかわらず、それを十分に生かそうとする意気込みは感じられない。むしろ、物語には想い人公主（＝式子）に嫉妬されるほど想われている少将氏忠（＝定家自身）を描く、いわば「妄想を書くことの快楽」があるように思われるのだ。いわば現実でかなわなかった夢を『松浦宮物語』に託したのだといえ、あまりに俗っぽい議論になるだろうか。

実は同じようなことが『松浦宮物語』の他の例にも言える。趣旨がずれるので本稿では詳述しないが、定家は『明月記』にかの有名な「紅旗征戎吾が事に非ず」との一文を残している。しかし『松浦宮物語』で氏忠は「紅旗征戎吾が事に非ず」ところか戦の最前線で大活躍し、敵将宇文会の首を取っているのである。『松浦宮物語』に、『保元物語』や『平家物語』などの軍記物語の影響が見受けられることは既に諸注釈書（『新編日本古典文学全集』・翰林書房『松浦宮物語』）で指摘されている。定家は源平の争乱を目の当たりにし、実際のところ関心がなかったはずはない。歌人として世事に惑わされぬ生き方を望む本来の自分にくわえて、戦で大活躍を収めるもう一人の自分を夢想したのではなかったか。それが、『松浦宮物語』に氏忠となって現れているとは言えないだろうか。『平家物語』にしろ、式子内親王の歌にしろ『松浦宮物語』とはあまりに同時代的すぎる影響関係であるが、〈作者〉と思しき定家のリアルな身体感覚として、自然とそれらの語句が思い浮かんだのだろう。『万葉集』や『うつほ物語』などの影響に目を奪われがちであるが、今後とも同時代の文学作品の

影響も積極的に見ていく必要がある。

もちろん『松浦宮物語』〈作者〉は百パーセント定家であると断定できるわけではないが、男性の〈作者〉の手によるものであることは間違いない。であるならば、次のことは言えよう。つまり男性の作者が、恋愛に戦いと全てにおいて成功を収める男性の物語として男性の読者のために書いた、それが『松浦宮物語』だったのではないかと。かつて玉上琢弥は『源氏物語』を評して「女による女のための女の世界の物語」と述べたが、その逆をいくのが『松浦宮物語』なのではないだろうか。式子内親王のような高貴で情熱的な歌人の影は、その恋愛の相手には格好の彩りとなったということだ。<sup>(6)</sup>式子との関連や、戦場における氏忠の活躍を考えると〈作者〉を定家として論じるのが自然ではあるが、必ずしも定家にこだわる必要もないことを付け加えておく。

卷三における華陽公主の恨みを受け止める場面においてその状況を氏忠はどこか楽しんでる印象さえ感じ取れるのも、「男性の物語」だからと考えれば説明がつく。

「知らぬ世も君にまどひし道なれば、いづれの浦の波か越ゆべき

あやしう。夢のやうなるひが耳の聞きゆるかな。などかう心得ぬことは」と、せめてかき寄すれど、なほうちこぼれつつ解けぬ御気色、わりなき心のうちには、

「我も人も異なるゆるを聞きしかど、世の常ならずありがたき見る目に契りを結びながら、なほ心にしみて物思ふべくも生まれ来にけるかな」

(一三八ページ)

「わりなき」と感じる一方で「ありがたき見る目」、つまり滅多にないほどすばらしい容姿の唐后と契りを結んだことをまったく後悔していない。板ばさみの状況を氏忠は全く悲観していないのだ。

これはちょうど、六条院における光源氏と状況は似ていよう。『みやび異説』『源氏物語』という文化』（森話社、二〇〇二）の『源氏物語』のパラドックス」と題された座談会で、六条院の光源氏は「初音」巻で紫の上と明石君の間で板ばさみになっており、既にこの時点で源氏はぶざまであるという小嶋菜温子の指摘に対し、土方洋一は「格好わるいといわれたけれど、作者は格好いいつもりで書いているのではないですか」「女性関係でわずらうことは格好いいことじゃないですか（笑）」と反論する。おそらくこれに関しては土方の読みが正しいと思われる。物語は女性の間で板ばさみにあって悩む光源氏を色男特有の性質とし、いわば「格好いいもの」として描いている。同様に『松浦宮物語』でも、おそらく物語は唐后と華陽公主という二人の美女の間で板ばさみになる主人公、氏忠を「格好いいつもりで書いている」のではなからうか。定家と思しき男性〈作者〉が、自らの満足のために書いたとも考えられようし、また氏忠に感情移入して読む男性読者に対して「格好いい男」の悩みを共有してもらおうというサービスを試みたと考えられよう。先に『松浦宮物語』は男性の読者のために書かれた物語だと考えたゆえんである。物語は、もはや女性や子どもだけのものではない。事実、定家の父俊成は『源氏物語』を読むことを推奨し、定家自身も数多くの物語を読み写している。『松浦宮物語』が生まれた時代はそういう時代ではなかったか。

ひとまず本項では華陽公主に式子内親王の影響が見られること、そして氏忠と式子の関係は現実世界における式子と定家の関係に敷衍できることを考察した。問題を定家にひきつけて考えれば、現実ではかなわなかった懂れの人、式子との恋を定家は『松浦宮物語』で成就させていたのであった。

さらにこの氏忠の、華陽公主との恋愛を成就させながら唐后との板ばさみになる「格好いい」姿、あるいは戦で大活躍する姿から『松浦宮物語』はいわば「男性の男性による男性のための物語」であることを明らかにした。華陽公主には前項までに見てきた先行物語の女たちの後継者的な一面が確かにありつつも、それが十全に「女の苦悩」の物語へと主題化されなかったことも、それで説明がついたのではないか。美女が色男の主人公に対して嫉妬する、それほど主人公は女から想われているし、それほど格好いいのだというほうへ問題は回収されていく。「苦悩する女」の要素は、そのように変質して『松浦宮物語』内に取り込まれていくのである。主人公に感情移入して読む男性読者はその展開を面白がったのではあるまいか。何より物語の〈作者〉がその展開を楽しんでいることが、表面的には「わりなき」と思い悩む氏忠の背後から透けて見えてくるのである。

## 五 むすびにかえて

ここまで、華陽公主がどのような女たちの影を背負って造型されているかを中心に、『松浦宮物語』における彼女の意義について考察してきた。

ひとまず華陽公主は、琴の伝授を仙人から受けるという点で『夜の寢覚』の中の君の造型を、そして臨終の際に「露」という言葉が用いられている点で紫の上の造型を受け継いでいた。そしてその両者に共通する「女の身」の生きづらさ、女の苦悩といった問題意識を華陽公主もまた持つており、男に心を分けられる女性として紫の上、中の君の末裔というべき立場に一面で確かに立っていた。

ただ、『松浦宮物語』全体で見たときにその問題が他面であまり深められていない印象があり、その理由も

検討した。その結果、物語は板ばさみにあっていて主人公を格好いいものと思って描いている面が考えられた。「苦悩する女」のイメージは、ある種の単なる道具立てとして物語内に変質されて取り込まれているのであった。また、華陽公主には式子内親王的な要素も見受けられ、式子に憧れを抱いていた定家の個人的な願望がそこには投影されているのではないかと考察をくわえた。

『松浦宮物語』はこれまでも指摘されてきたように、数多くの先行する文学作品の上に成り立っている、文字通りの文学「テキスト」である。華陽公主ひとりとしてみても、その造型に影響を与えた作品はひとつではない。本稿では人物として紫の上、中の君、式子内親王をあげたが、他にもたとえば『うつほ物語』の俊蔭の娘や、『源氏物語』の明石君などの影響もあると考えられる。華陽公主についてはなお総合的に考えていく必要があるだろう。

最後になったが、今後の課題として『松浦宮物語』で他に氏忠の恋の相手となる二人の女性、神奈備の皇女と唐後の造型をどう考えるかという問題が残った。再度稿を改めて考察したい。ここで見通しだけ簡単に述べれば、たとえば神奈備の皇女に関しては、一度氏忠を振り切って入内するものの、彼が帰国した後、歌を詠み贈っている。氏忠は返歌だけはするが、まともに取り合わない。この「振られた女を出世して見返す」という趣向もまた、『松浦宮物語』が「男性のために書かれた」物語であるという証左ではないだろうか。男性にとって〈物語〉とは何なのか、そういう問題を『松浦宮物語』は提示している。

『源氏物語』に代表される、女性の手によりなると思しき文学作品（『うつほ物語』は除外されよう）を多数手本に取りながら『松浦宮物語』はそれらとは確実に異なる物語世界を描き出す。先行する物語文学に対する大いなる挑戦なのか、せめてもの反抗なのか、それとも他愛もない戯れなのか。今後、さらに検討し、明らか

にしていきたい。

注

- (1) 阿部真弓 『松浦宮物語』に見える須磨、明石巻の影」(『詞林』一五号 一九九五、四)
- (2) 長尾佐和子 『松浦宮物語』における狭衣和歌の影響」(『詞林』一五号 一九九五、四)
- (3) 中原香苗 『松浦宮物語』における先行物語撰取の様相——弁少将の琴伝授と華陽公主との恋の場面をめぐって——」(『詞林』一五号 一九九五、四)
- (4) 浅田徹 「松浦宮物語卷一の和歌をめぐって——本歌取りと擬古」(『国文学』第四六卷一〇号 二〇〇一、一一)
- (5) 玉上琢弥 「源氏物語・紫式部——女による女のための女の世界の物語——」(『国文学解釈と鑑賞』第二六卷六号 一九六一、五)
- (6) 森晴彦は 『松浦宮物語』神奈備皇女の原像と変奏(下)——神奈備・華陽公主・鄧皇后の連関性と定家——」(『解釈』第四一卷一—号一九九五、一一)のなかで、『松浦宮物語』の女性達は、若年の定家の胸に刻まれた強い式子内親王の印象のデフォルメ」だと論ずる。本稿では特に華陽公主への影響を指摘したが、森の指摘通り、他の女性に対しても式子の影響があるとも考えうる。改めて検討したい。

Thinking about “The tale of Maturanomiya” Princess Kayo

ISE, Hikaru

This thesis especially discusses the Princess Kayo about “The tale of Maturanomiya” The influence of story preceding and a variety of is seen in “The tale of Maturanomiya”. A forming of princess Kayo also is influenced from preceding story. The purpose of this thesis is to clear what influences forming princess Kayo and to clear what does the story try by handling her.

In this thesis, the influence of Naka no kimi at “Yoru no nezame” and Murasaki no ue at “The Tale of Genji”<sup>1)</sup> pointed out first. These women was shouldering suffering. Because they have to do count on a man who has other women. The same thing can be said also to princess Kayo. Therefore, I pointed out if that she is a successor of these women.

Though she was a successor in the one side that is certainly, the problem, that is, their “Suffer of the woman” is not made a focus. This reason is that the problem, “Suffer of the woman” changes in quality at this story. This problem do not focus in women’s mind but focuses a man who becomes dilemma among women. This story depicts a man assuming that it is cool.

The very important fact is Princess Kayo having been influenced another person is not only two people but also princess Shikishi. She was a woman of author (Fuziwara no Sadaie) ’s yearning. The author had him accomplish the desire that ended in the yearning in the story in the reality. This story made situation fall in love by such a woman, and careless in woman’s feelings. In a word, this story of the man, by the man, for the man.

In the near future, I am going to think about the problem of two heroines of the remainder. I want to continue thinking about this story, to a total.